

台湾における社会科教育

井田 仁 康*

1. はじめに

台湾の中華民国政府は、1968年に教育レベルの向上を図って、義務教育期間を6年から9年に延長した。それにより、満6歳から始まる国民小学6年間と国民中学3年間が義務教育となった。さらに、高級中学（高校）3年あるいは職業学校3年を経て大学¹⁾および独立学院（単科大学）に進学することになる。また、日本の高専にあたる5年制の専科学校もある。すなわち、日本の教育システムと類似しているといえる。ただし、師範大学では4年の単位取得の後、1年の実習期間があることが日本のシステムと異なる点である。

ところで、劉(1995)²⁾は、このような台湾の教育システムにおける地理教育の教育内容、教育方針、教育方法の変遷について明らかにした。それによると、1968年以前の地理教育では反共抗ソが貫かれ、中国の広大な国土、豊富な資源および台湾の地理環境を教えることによって、愛国心を啓発しようとしていた。1968年以降、社会科が発足し、地理および歴史は社会科の中に統合されたが、教育内容、教育方針、教育方法に大きな変化がなかった。すなわち、社会科においても清時代以来の教育の伝統である、民族精神と愛国思想を啓発する社会科が行われていたのである。1972年の教育制度の改定で、社会科（地理的内容）の内容は、台湾の経済力の向上を反映して、台湾の自然環境、生活の豊かさをはじめとし台湾に関する事象が多くなったが、反共の精神と愛国心を高揚させようとするには変わりがない。このように、台湾では台湾の政治的問題が社会科に強く関与していると劉(1995)は結論づけている。

その国の政治問題や経済状況が、社会科に反映しているのは日本も同様である。例えば、高度経済成長期までのわが国の社会科、特に地理的内容および分野では、産業学習に偏重していたが、生活にゆとりがみられるようになってからは、生活・文化学習に重みがかかるようになった。

そこで本稿では、台湾の社会科教育の発展の経緯を踏まえながら、現在の台湾の社会科教育の現状をみることにする。台湾では、国定教科書が用いられているので、主たる分析資料は、国民小学と国民中学の社会科教科書およびわが国の学習指導要領にあたる国民小学課程標準³⁾、国民中学課程標準である⁴⁾。研究方法としては、まず、台湾の児童・生徒数の推移を統計資料⁵⁾から明らかにし、国民小学の社会科の内容および国民中学の社会科の内容を検討する。台湾では国民小学では社会科であるが、国民中学では社会学科という教科の枠組みの中で、認識台湾（社会、歴史、地理）と公民・道徳、歴史、地理の4科目がある。さらに、近年注目されている環境教育についても言及する。

2. 台湾の児童・生徒・学生数の推移

台湾は教育熱心であるといわれるが、本章ではそれを統計的に明らかにする。台湾政府による教育経費は毎年増加する傾向にあり、1993年における教育経費は国民総生産額の7.1%に達する。また、学校数も1950年の1,504校から1994年には7,086校に増加し、1クラスあたりの生徒数は、

* 筑波大学教育学系

51.8人から1994年には40.2人となり、教育環境は改善されている。さらに、人口千あたりの就学者数をみると、1950年で139.6人であったのに対し、1994年には249.1人となり、確実に教育を受けている人口が増加し、しかも高学歴になっていることが窺われる⁶⁾。そこで次に、台湾が高学歴社会に移っていく状況を見てみる。

第1表 台湾における児童・生徒・学生数の推移
(千人)

学校 年	1954	1964	1974	1984	1994
国民小学	1,133(100)	2,203 (212)	2,407 (212)	2,273(201)	2,032(179)
国民中学 (初中)	101(100)	383 (379)	991 (981)	1,078(1067)	1,177(1166)
高級中学	24(100)	101 (417)	185 (766)	192(795)	246(1015)
大 学	9(100)	45 (502)	129(1432)	174(1932)	302(3356)

() 内は、1954年の数を100 としたときの増加係数。

(参考文献5) より作成)

第1表は、1954年、1964年、そして義務教育延長後の1974年、1984年、1994年の10年ごとの、国民小学、国民中学（初級中学）、高級中学、大学の児童数、生徒数、学生数の推移を示したものである。この表から次の特徴を指摘することができる。まず第一に、国民小学の児童数が1954年から64年にかけて2倍近く増加しているが、その後、児童数は大きく増加していないことである。この時期は、国民小学が義務教育であったことから、人口の増加や義務教育の徹底化などで児童数が伸びたと考えられる。また、この時期は初・高級中学、大学の生徒および学生数も4倍から5倍に増加していることから、台湾の教育熱の高まりが読み取れる。第2の特徴は、義務教育となった国民中学の生徒数が1964年から74年にかけて急激に増加していることで、義務教育延長の効果がはっきりと現れている。第3の特徴として、義務教育の延長にともなって、高級中学および大学の進学者も顕著に増加し、さらに1984年から94年にかけての高級中学および大学の進学者の増加数は著しいことである。第1表には高級中学の学生数のみを示したが、職業高校への進学者も増加し、1971年からは高級中学の生徒数を上回り、1994年には高級中学の生徒数の2倍以上の52万4千人が職業高校に在籍している。大学の学生数の増加はより一層顕著で、1984年の学生数は、1954年の19倍であり、1994年の学生数は1954年の34倍に達する。台湾では1964年の時点で公立大学の学生数が私立大学の学生数を上回っていたが、1968年には私立大学の学生数が公立大学の学生数より多くなった。

このように、台湾では高学歴の傾向が、とくに1964年から74年の義務教育延長の時期と1984年に降に顕著に認められるようになった。大学の学生数の増加は、私立大学によるところが少なくない。このような教育環境のなかで、社会科はどのように機能しているのいであろうか。次章では、国民小学の社会科について検討する。

3. 国民小学の社会科

国民小学は、生活教育および道徳教育が中心となり、それを受けて国民小学社会科の目標は4点にまとめられている。第1は、児童の自我概念を適切に養い、集団関係の和を大切にし、良い

生活習慣を身につけ、人格を形成させることである。第2は、児童の生活環境を理解させ、中国の歴史および地理、文化を理解し、郷土愛、社会愛、国家愛の心を培うことである。第3は、世界の大勢を理解させ、児童の視野を広げ、平等、相互扶助を世界的な観点から養うことである。そして、第4は、児童の思想的批判能力を高め、価値判断や問題解決能力を培い、民主社会の生活基盤を固め、発展的で積極的な人生観をもつことに適応させることである。このように社会科の目標は、劉(1995)が指摘したように、愛国、愛郷心を高揚し啓発させる一面ももつが、目標の4点目にあるように、批判的能力を高め、価値判断や問題解決能力を培うことが明言されていることから、アメリカの社会科にきわめて近い側面もあわせもつ。また、郷土愛を唱えながらも、世界的視野からの重要性を強調することから、清時代からの伝統と世界的な風潮の両者を取り入れた目標となっているといえよう。

第2表 国民小学社会科の教育課程

領域	個人領域	家族領域	学校領域	地方領域	国家領域	世界領域
主題	友達 (1) 余暇 (2) 団体生活 (2) 学習と成長(3)	家族 (1) 家族の生活(1) 家計 (2)	クラス (1) 学校の施設(1) 学校生活 (1) 自治活動 (3) 人間関係 (3)	生活環境 (2) 郷鎮市区 (3) 県 (3) 湾の地理 (4) 自然資源 (4) 経済発展 (4) 社会変化 (4) 経済活動 (5) 習俗と生活(2)	地理環境 (5) 府と民衆 (5) 生活規範 (5) 民族の融合(5) 中華文化 (5)	地理環境 (6) 文明と生活(6) 文化交流 (6) 地球村 (6) -多文化社会- 地球村 (6) -地球資源-
関連学問	地理学 社会学 経済学 心理学	社会学 経済学	地理学 政治学 社会学 経済学 心理学	地理学 政治学 社会学 経済学 歴史学	地理学 政治学 社会学 歴史学	地理学 社会学 経済学 歴史学 心理学

()内は履修学年を示す。

(参考文献3)より作成)

次に、社会科の教材概要について検討する。第2表は、国民小学社会科の領域、主題と履修学年、関連学問を示したものである。領域は、6の領域からなり、それぞれの領域には3から9の主題が設けられ、それぞれの主題が何学年で学習するのか指示されている。領域は、個人領域、家族領域、学校領域、地方領域、国家領域、世界領域と同心円の拡大構造をとっている。学習順序も、主題で多少の入れ替わりがあるが、個人、家族、学校領域は低学年で学習され、地方領域は中学年で、そして国家、世界領域は高学年で学習される。それらに関連する学問分野として、地理学、政治学、社会学、経済学、歴史学、心理学があげられている。このように、学習は個人から世界までおよび、原則的に同心円拡大の構造である。主となる教材である教科書は、各学年とも上下2冊であり、カラー刷のおよそ50から100ページ程度の厚さである。なお、社会科の配当時間は、1、2年生が週2時間、3年以上が週3時間となっている。

各領域ごとの特徴は次のようになる。まず、個人領域では、基本的生活習慣を身につけさせる内容となっており、団体活動の重要性なども唱えている。家庭領域では、家族の関係だけでなく、

お手伝いなどの道徳的問題も盛り込まれている。学校領域では、3年生で問題解決学習などの学習方法についても学ぶ。地方領域では、台湾の地理や歴史などを学習するが、事実だけでなく団体における秩序の重要性を学習するようになっている。国家領域においては、台湾のみならず中国全土の地誌、歴史を概観する。しかし、現代の歴史については深入りしていないことから、日本や大陸政府については多くを述べていない。さらに、世界領域においては、地球をひとつの村とみなして、多文化教育、自然環境問題なども取り上げ、個人ひとりひとりがどのように行動したらよいかという問題を考察するようになっている。このように、教科書を検討すると、団体としての秩序を重視し、国家としての国民の団結を促す、つまり民族主義と愛国精神を啓発する側面が強いことは否定できない。しかし、国家主義を重視しながら、環境や文化に関しては地球村という概念を用いて、地球的規模での考察も取り入れている。また、個人的行動も教科書では重視しているが、あくまでも国家主義の枠内での規範化された個人的行動という印象である。したがって、目標で述べたような、アメリカの社会科のような価値判断、意志決定の育成を目指したものであるか否かは、教科書だけでは判断できない。少なくとも、教科書のみの検討からでは、より一層限定された枠内での、選択の余地の少ない価値判断、意志決定であるように判断される。

4. 国民中学社会科

(1) 認識台湾

国民中学では、社会学科の枠組みの中で、1年生において「認識台湾」を学習し、社会、歴史、地理分野がそれぞれ毎週1時間配当される。ただし、学校の裁量で、それぞれの分野を短期間に集中して行うことも可能である。認識台湾（社会）では、台湾の社会環境を認識し、愛国心を高め、生命共同体を強く意識し、良好な社会生活の規範が実践できるような能力を養うことが目的とされる。授業内容としては、台湾の言語、習慣、教育、経済、政治、宗教、重要な社会問題などの講義を受け、討論、訪問、調査などを通して社会生活の実践活動を直接、間接的に経験することになっている。国民中学課程標準では、講義を全時間の8割、実践活動を2割程度と規定している。また、社会生活の規範として、誠実、愛国、法を守る、仁愛、孝行、礼儀、勤勉、正義、公德、義務、協力、尊重といった徳目があげられ、それぞれの徳目についての具体的な実践例が示されている。儒教が強く反映した道徳的科目であるが、国民小学では道徳が独立した科目として存在していたのに対し、国民中学では道徳が社会学科に含まれるために、このようにきわめて道徳的な科目となっている。台湾としての結束を道徳的に固めなければならないという、台湾の政治事情および国際的な立場が明瞭に読み取れる。

認識台湾（歴史）では、台湾の歴史が原住民のみの時代から現代まで大観するように授業が組まれる。特徴としては、清時代および日本植民統治時代が詳細に学習され、現代では台湾の国防を中共の脅威から守るためと明示していることがあげられる。認識台湾（地理）は、6単元からなり、それぞれの単元の名称は、土地、生態、人口、産業、生活、区域と統計である。台湾の地理を系統的に学習するようになっている。特徴としては、内容面では生活が重視されていることである。生活の単元では、集落の存在条件や集落の類型化、都市と農村との生活が主題となり、さらに交通と通信という小単元があり、余暇と旅行が小単元として組まれている。余暇と旅行で

は、余暇の定義や余暇活動の空間的分析、国内旅行と海外旅行が主題となる。近年、台湾でも、日本と同様に外国旅行者が増加している。そのような需要と子供たちの興味にあった内容を学習に取り入れているといえよう。また方法面での特徴として、各単元のおわりに、資料整理と討論の時間を設け、資料整理、討論だけでなく野外観察も各単元ごとに組むことができるようになっている。すなわち、知識の注入のみでおわらせることなく、生徒が主体的に学習できる方法や、地理では重要な野外での学習を重視しているのである。

以上のように、認識台湾の特徴をあげてきたが、認識台湾は、小学校の社会科と国民中学で専門化する公民と道徳、歴史、地理を学習する前の入門的な科目だと位置付けることができる。日本でいえば、平成元年度版学習指導要領以前の高校1年の現代社会に対応するものと考えられるが、台湾では中学1年でそのような科目が設けられ、中学2年からはより一層分化した科目を履修することになる。

なお、日本の学習指導要領にあたる国民中学課程標準の標記の仕方は、同じ科目でも統一されていない。認識台湾を例にすれば、認識台湾（社会）は詳細に書かれているが羅列的である。また認識台湾（歴史）は、学習項目は示されているがいたって簡単である。認識台湾（地理）は、単元方式を明確に示し、さらに単元間の関係が図示され、それらの関係が明瞭に示され、単元、小単元、主題、そしてその主題の主要概念、技能、具体的目標が示されている。アメリカなど他国のカリキュラム（シラバス）を検討したことが現れ、細部にわたって指示されている。それは割かれているページ数をみても明らかである。認識台湾（社会）が14ページ、（歴史）が8ページ、（地理）が44ページである。各科目の内容は課程標準で規定されるが、その規定および記述の仕方は執筆者によりかなり相違がみられるのである。科目の特性という問題もあるが、国民中学課程標準をみるかぎりでは、社会学科の中でも地理が、外国の流れなどもつかみ、積極的に教育課程を進展させているといえよう。そこで、国民中学2、3年生においては、地理に着目し、課程標準および教科書を検討する。

(2) 地理

国民中学2年、3年の両学年にわたって、公民と道徳、歴史、地理がそれぞれ週2時間配当されている。地理の目標は、地理の基本的概念の理解、中国各地の生活様式と地理環境の理解、それを通しての郷土愛、愛国心を養成すること、および世界の主要地区の生活様式および地理環境の理解を通して自らを尊び、他人をも尊重する民族の情操を養うことなどである。地理は各学年前後期それぞれ1冊、計4冊の教科書が用意されている。第1冊は大陸を含めた中国地理で系統的に単元が構成されている。第3表には、第1冊の単元と主題、主要概念および配分時間数が示される。さらに、課程標準には単元ごとに主要技能が示される。例えば、単元中国の都では、主要技能としては都市化と都市成長の差異の討論と記されている。また課程標準では、大陸を含めた中国全土を「わが国の国土」として学習するようになっている。すなわち、台湾は中国台湾省であり、台湾のみで独立した国家ではないという政府の見解が明確に示されている。台湾では大陸との統合を訴える国民党が、1995年現在政権を握っているが、台湾を独立させるべきとの見解をとる党が政権についた場合には、地理の教育課程にも大きな変革があることは、十分推測でき

第3表 国民中学地理第1冊（2年前期）の教育課程

単元	主題	主要概念	配分間数
中国の領域	1 位置 2 面積と形状 3 国境と隣国	領土、円形比、細長比、 自然境界、人為境界、 陸と海の隣国	2
中国の地形	1 中国の地形の特徴 2 平野、盆地、丘陵 3 高山、高原 4 砂漠 5 海岸	地形、平野、盆地、 丘陵、高山、高原、砂漠、 砂浜海岸、岩石海岸	4
中国の気候	1 気候の影響要素 2 気温の地域的差異 3 降雨量の季節的差異 4 降雨量の地域的差異 5 気候類型	太陽高度、気温、温度差、 降雨量、等雨量線、季節風、 乾燥気候、高山気候	4
中国の水文	1 外流区と内流区 2 主要河川、湖沼、海	外流区、内流区、淡水湖、 汽水湖	2
中国の土壌	1 土壌の成因 2 土壌の種類と分布	土壌図	1
中国の植物	1 植物の分布 2 資源保護	森林、草原、ステップ	1
中国の人口	1 人口 2 人口分布 3 人口動態	自然増加率、人口ピラミッド、 人口移動、社会増加率	2
中国の農業	1 農業発展の条件 2 農業経営の地域的差異 3 主要作物の分布	無霜期、降水、高度、市場、 政策、農業集約度、農業類型	2
中国の漁、林、 牧畜業	1 漁業の発展 2 林業の発展 3 牧畜業の発展	漁業、牧畜、林業	2
中国の鉱業と資源	1 主要鉱物の分布と開発 2 主要資源の分布	鉱物、資源	1
中国の工業	1 工業地帯の立地条件 2 工業の特徴と分布	工業地帯、立地条件	2
中国の交通	1 内航海運 2 陸上交通 3 海上と航空運輸	交通	2
中国の都市	1 都市化 2 都市の類型と分布	都市成長、都市機能	2
中国の行政区と 6大地区	1 行政区と区分けの要件 2 6大地区の位置、 範囲、地理的特色	行政区一省、直轄市、 地方、 6大地区一華南、華中、 華北、東北、モンゴル、西部	3

（参考文献4）より作成

る。ともあれ、第1冊は、大陸を含めた中国の系統地理であり、自然地理先習でしかも単元や配当時間数をもみても自然地理が重視されていることが特徴である。2年の後期に学習する教科書の第2冊は、大陸の省ごとの地誌であり、15の省が単元となっている。中国大陸の地誌は3年の前期の教科書第3冊に引き継がれる。15単元のうち10単元が、大陸の省もしくは地区である。第3冊の5単元と3年後期の教科書第4冊14単元は、世界地誌であり、世界を州に分けたものが単元となる。

国民小学および認識台湾で、身近な地域(郷土)を主として学習した後、国民中学の地理では大陸を含めた中国、世界を学習する。国民中学地理の教科書は、カラー刷で図表や写真も多い。このような学習を踏まえ、高級中学のより一層深化した内容の地理、人文地理、経済地理といった科目にはいっていく。

5. 環境問題の扱い

台湾の自動車台数は、第4表に示したように急増している⁷⁾。台湾のとくに都市部での交通渋滞は著しく、自動車の排気ガスによる大気汚染も深刻化している。そのような中で、世界的規模で問題になっている環境問題について台湾での取り上げ方について考察する。本稿では、社会科で取り上げられているもののみを対象とし、しかも大きな枠組みとして扱われている環境問題に着目する。

第4表 台湾における自動車台数の推移

年	1974	1979	1984	1989	1994
台数(千台)	1,678	3,909	7,350	10,165	16,349
増加指数	100	233	438	606	986

(参考文献7)より作成)

国民小学では6年生の地球村の主題で大きく扱われる。具体的には人口増加、急激な科学発展、熱帯雨林伐採などの無駄な資源利用、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨などの環境汚染が取り上げられている。科学技術の発展では、機械化が進み、人々の生活が便利になった反面、空気汚染が進んでいることを、台湾の自動車による排気ガスの写真を交えて教科書は記述している。また、国民中学の認識台湾(地理)で、6つの各単元のおわりに討論するテーマを次のように提示している。すなわち、土地問題、自然環境問題、台湾の人口問題、産業問題、生活問題、区域および統計問題であるが、環境にかかわる問題がほとんどで、環境問題が重要な討論のテーマとなっていることが明らかである。認識台湾(社会)においては、重要な台湾の社会問題として環境問題が、家庭問題、犯罪問題とともに学習される。したがって、台湾の社会科、とくに地理においては、台湾それ自身の環境を含め、環境問題が重要な教育課題のひとつとなっているといえよう。

6. むすび

本稿は、高学歴の進む台湾の社会科の特徴について、国民小学および国民中学について検討してきた。その結果、以下のような特徴を見いだすことができた。まず第1に、郷土愛、愛国心、民族主義を高揚する、きわめて儒教的色彩の強い道徳的内容が多く盛り込まれていることである。それは劉(1995)によっても指摘されているが、小学校社会科および中学校認識台湾(社会)でとくに顕著に認められる。第2に、問題解決能力や価値判断を目標にかかげ、その意味ではより一層アメリカ社会科に近いことである。しかし、教科書などにおける記述から検討すると、問題解決や価値判断の際には、台湾の社会規範が強い枠をつくり、問題解決や価値判断の選択の余地を狭めている。第3に、アメリカ社会科をはじめとする外国の影響が、とくに国民中学の地理に関する教育課程の記述でみられることである。第4に、台湾で問題となっている環境問題は、小学校から積極的に取り上げられていることである。

本稿の分析資料は、日本の学習指導要領にあたる課程標準と国定教科書⁸⁾である。したがって、実際の授業の実態や児童・生徒の知識、感情については言及できていない。それは今後に残された研究課題である。

注および参考文献

- 1) 3個以上の学院(学部)をもつものを大学という。
- 2) 劉 伯雲(1995):台湾における中華民国政府による地理教育の展開 — 小・中学校の場合 — . 新地理, 42-4, pp. 40~50.
- 3) 中華民国教育部編(1993):『国民小学課程標準』403p.
- 4) 中華民国教育部編(1994):『国民中学課程標準』926p.
- 5) 中華民国教育部編(1995):『教育統計』284p.
- 6) 統計の数値は前掲5)。
- 7) 中華民国交通部運輸研究所(1995):『運輸資料分析』436P.
- 8) 本稿で分析した国民小学社会科の教科書および国民中学地理の教科書は、1995年に改定されたものを採用している。